

の選考委員のお一人ですが、選考は侃々諤々かんかんかくかくになりますか。

高樹 一種のバトルです。そして公正さを保つために、内部での発言は記者会見と選評以外では明かしません。文学は数値で表されるものではないですから。選ばれる方も選ぶ方も相対的な関係だと思っています。

佐木 特別企画展の話ですが、高樹さんの原稿のタイトルが、「早春」から「光抱く友



高樹のぶ子さんと佐木館長

よ」に変更されていますね。高樹 二十何年ぶりに気がつき

ました。少女達の早春の物語ではあるんですが、「新潮」の編集長に弱いと言われて。もっとフォーカスが合ってるものをといて注文中で、校了ぎりぎりです。まだ文庫本で増刷されていて、去年もテレビドラマになりました。恋愛小説でも華やかなものでもなく、地方の高校生の話で、今受ける要素はないと思って

ましたが、現在もこういう少女達の問題や悩みはあるのかもしれない。

佐木 高樹さんのお出しになった本で、一番たくさん売れたのは何ですか。

高樹 長く売れ続けているのは「光抱く友よ」でしょうね。でも、今は本が売れないし、読まなくなっている。アナザーワールドに遊ぶ心の余裕がないのかしら。子供

の頃に何か読みふけったりする時って、別の人生に飛び込んじゃって。その楽しみのためには目で活字を追う習慣がないと。「遊ぶ」事で、一番学べるんだと思います。楽しいものじゃないと体に入

ってこない。私の「水脈」はダイビングで遊んで海や水の感覚を感じたから生まれました。「透光の樹」は恋愛小説で、頭で作ったんじゃない、恋愛を楽しんだり苦しんだりした中から出てきたもの。体

で感じたもの、「肉体的感情」って私は言うんですけど、特に女性は「肉体的感情」を持ってます。感情ってハートと

か頭であるようだけど、寒い時は心も凍るし、暑い日差しの中だと心も溶け出していく。人間の頭や精神は五感で

支配されています。感情は頭じゃなくて肉体から出発するものだと実感しています。佐木 森鷗外が遊びという言葉をよく使っていました。高樹 漱石も鷗外も文豪と呼ばれる人達は、日本は、あるいは人間はどうあるべきかとい

う壮大な質問にも、自分の答えを用意していました。今の小説家は、そんな問いかけに答えは出ないと思ってる人もたくさんいます。個人的で完結した世界があれば、存在が許されるという時代になったのかしら。

佐木 九州大学特任教授として「VIS」というプロジェクトを始められたきっかけは。高樹 大学も、もっと社会との交流が必要だという認識が出てきて声がかかりました。私は文学を教えることはできないから、クリエイティブな仕事として九大に関わることが

できればということでした。今までにアジアの三カ国を訪れ、新聞や雑誌、テレビ、シンポジウム、Webなどメディアを網羅して成果を発信しています。アジアは植民地支配との戦いの中で文学が生まれていますから、逆に日本における文学の現状の脳天気が見えるような気もしています。

北九州芸術劇場・小劇場
参加者約一七〇人

文学講座
3月31日(土)〜4月28日(土)

本展開催中、研究者の先生方による文学講座を行いました。様々な視点からの興味深い内容で、それぞれの作家像に肉薄しました。

受講者各回約三〇人

◎中原豊氏(中原中也記念館副館長)

「中原中也―生誕百年を迎えて―」

◎久保田裕子氏(福岡教育大学准教授)

「三島由紀夫「潮騒」―戦後の青春と恋愛―」

◎北川透氏(梅光学院大学副学長)

「谷川俊太郎の宇宙感覚について」

◎松本常彦氏(九州大学大学院教授)

「葛西・石坂・太宰」

◎石田忠彦氏(鹿児島女子短期大学学長)

「川端康成の青春・その後」



北川透氏